魯迅の「故郷」メモ

蟹澤聰史

魯迅は 1919 年の末に，帰郷して家を整理し，一家をあげて北京に移住した。その理由は『吶喊』自序に詳しく記されている。魯迅の生家が裕福な暮らし向きから，急に落ちぶれてしまったからであった。「故郷」はその時の経験を加工したものであろう(竹内好『魯迅選集第一巻』)。文中の引用は竹内好『魯迅選集　第一巻』岩波書店(1964 年　第二刷)による。

１．魯迅が「故郷」を発表した当時の中国の状況

中国を長年にわたり支配していた清朝を倒して中華民国となった辛亥革命（1911 年）を経て， 続いて新文化運動（1915 年～）が起こった時期である。これは難解な文語から口語(白話)への転換を目指し，思想・文化面で「人間」を新しくしようとした運動であった。一方で皇帝・宣統帝はいなくなったが，国民主体の社会にはならなかった。つまり，辛亥革命が失敗に終わったのを受けて，それを乗り越えるために新文化運動が始まったと考えて良いだろう。魯迅は『狂人日記』『阿Ｑ正伝』などを発表した。そのような背景を念頭に置いて読めば，この『故郷』の主人公の思いが分かるのではないだろうか。

２．登場人物

主人公「私」であり，「迅ちゃん」とあるので魯迅自身を描いたのである。私はおよそ 20 年ぶりに母と甥の宏児(ホンル)のいる故郷に帰ってきた。

久しぶりの故郷には「私」の幼友達閏土(ルントウ)がいた。幼い頃の彼については，「紺碧の空，一輪の金いろのまるい月，海岸の砂地，見渡す限りの緑の西瓜，十一，二歳の少年が座っている。首に銀の首飾り，手に鉄の刺又，一匹のチャー(猹　魯迅の創作文字)目がけてヤッと突く，チャーは逃げる」とある。チャーはどんな動物だろう。毛が脂ぎっているとのことだ。アナグマかイタチ，ハクビシンなどか。

生家の筋向いの豆腐屋の「豆腐屋小町」といわれた揚(ヤン)おばさんに久しぶりに会ったらコンパスのような長い脚だ。

３．子供の頃の思い出

正月に祖先の像を祭る大祭の当番のときに，手伝いに来る人を「忙月」マンユエといい，閏土の父親がそのマンユエだった。息子の閏土はその手伝いに私の家に来ていた。閏土は罠で小鳥をとるのが上手だった。私は閏土に鳥をとってくれと言ったが，それはダメだよ。

正月が過ぎると閏土は仕事が一段落したので家に帰る。私も閏土もさびしくて辛かった。

４．久しぶりの邂逅

私は閏土に久しぶりに会うとそんな思いが甦ったが，20 年ぶりに子どもの水生(シュイション)を連れた閏土に逢ったのに，閏土の対応はこどもの頃とはまったく違って「旦那様」と私に言った。しかし水生は 20 年前の閏土そのものだった。私は「何たってよそ行きの言葉を使うんだね。昔は兄弟のようなロをきいたのに」と閏土に言ったが，「めっそうもない」と閏土は答えた。

いっぽう，甥の宏児(ホンル)はとても水生(シュイション)と気が合って，昔の私と閏土と同じようだ。二人は元気よく出て行った。

母と私は閏土の悲境を語り合った。子だくさん，不作続き，過酷なまでの税金，兵と匪と官と紳とがよってたかって彼を苦しめていたのだ。さて，この時代背景はどうなのだろう。辛亥革命は終わったが，相変わらず農民の暮らしは貧しいままである。

５．故郷との別れ

宏児は私に「汽車に乗ってゆくの？」と尋ねた。私は「汽車に乗ってゆくのだよ」と。また「お船は？」「はじめに，お船に乗って……」と。

私たちの船は，前へ前へと進んだ。両岸の山々は，黄昏のなかで，濃い紫色に変わり，つながって船尾の方へ後じさりした」とあるのは，最初は紹興の小さな運河を通って次第に大きな運河につながって，遠くには会稽山もみえる。もしかしたら銭塘江につながる川かなと想像する。……といった光景を描写したものであろう。そしてその後は汽車で北京に向かうのだ。掲げた写真は私が 2009 年に行った時の銭塘江の写真だが，こんな感じのところから上海に出て汽車に乗ったのだろうと想像する。ここは私の想像です。

６．故郷の意味するところ

故郷との別れの記述。それは「古い封建的な農村社会」から，「近代」へと進んでゆくことを意味しているのではないだろうか。それが，宏児や水生に託した夢，新しい希望なのであろうかと。また，宏児と水生とは友達となって，宏児は水生を慕っている。ここに希望が見いだされるということで最後のパラグラフにつながるのであろう。

７．よく知られている最後のパラグラフについて

「思うに希望とは，もともとあるものともいえぬし，ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば，それが道になるのだ」

８．竹内好の魯迅観

竹内好『魯迅』未来社(1977 第 15 巻)，209pp.

魯迅は 38 歳で『狂人日記』を発表して以来，『死せる魂』の訳稿を終えずに 56 歳で没した。およそ 18 年間の文筆生活であった。魯迅は，生前はあまり文学者として重視されず，どちらかと言えば疎外する者が多く，死後承認されるようになった。

魯迅は，同胞の精神的貧困を文学で救済するなぞという景気のいい志望を抱いて仙台を去ったのではない。……魯迅の文学の根源は無と称せられるべきであるべきある何者かである。その根源的な自覚を得たことが，彼を文学者たらしめている。

９．王欽(Wang Qin)『魯迅を読もう〈他者〉を求めて』(2022)

王欽は本書の中の「魯迅をいかに読むか？」で，「敢えて大胆なアプローチを提案する。魯迅のテクストに向かい合うときさまざまな手練手管をまずは置いておいて，彼の文面を実直に，丁寧に読んでいこう，と」提案している。しかし，魯迅の作品を読む限りにおいて，最低限当時の置かれた中国の状況をある程度把握していないと難しいであろうと私は思う。この著書は，私にとってたいへん刺激的なものでした。

閏土との再会の場面

「ああ，閏ちゃん……よく来たね……」　つづいて，多くの言葉が，数珠のようにつながって後から後から湧き出ようとした。角鶏，跳ね魚，貝殻，チャー……だが，それらは，何物かにせきとめられたような感じ

がした。頭のなかで，ぐるぐる廻っているだけで，口から外へは飛び出して来なかった。

　彼は立ちどまった。顔に，喜びと，寂しさの表情があらわれた。唇を動かしたが，声にはならなかった。ついに，彼の態度は，仰々しいものに変わった。そして，ハッキリとこう挨拶した。
「旦那さま」
私は身ぶるいしたような気がした。私たちの間に，すでに悲しむべき厚い壁が築かれたことをさとった。私は，口にする言葉を失った。

　この場面についての王欽の解釈　：　多くの論者はこの部分に重きを置いて，閏土の反応から小説の主旨をつかみとろうとしている。すなわち封建社会の制度や文化は私と閏土のあいだにある無辜の人間関係を破壊し，あるいはまた知識人と民衆の隔たりを作り出したため，民衆を動員して新しい社会を生み出していくべきだ，と。……　だが，すでに先行研究で指摘されているように，このような誤解は実は小説の細部には合致しない。それは何故か。

　「もとは鮮明このうえなかった」小英雄閏土の「おもかげ」は「私」の想像したイメージにすぎなかった。主人公は帰郷して自分を囲む「高い壁」に気付いたそのとき，その「未来に対するノスタルジア」のもたらすイメージはようやく消え去ろうとしていったのである。

参考文献

魯迅選集第一巻(1964)岩波書店
竹内好『魯迅』(1977)未来社
王欽『魯迅を読もう　<他者を求めて>』(2022)春秋社。

2026 年 10 月 26 日













左上：魯迅が幼少時代過ごした三味書屋(2009 年撮影)　右上：三味書屋近くの運河(2015 年撮影)　左中:幼少時代の閏土(ネットより引用)　右中(私の思い出のカゴで鳥を獲る方法，自作メモを AI で加工した　左下：会稽山を望む(2015 年撮影)　右下：六和塔からの銭塘江，作者はおそらくこの河川の下流から上海に向ったと想像される(2009 年撮影)